

博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

平成27年度

京都外国語大学

はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を
目的として、平成 28 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した
者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	辰巳 遼
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第14号
学位授与の日付	平成28年3月15日
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当
学位論文題目	音楽文化の実践とグローバルネットワーク ーアフリカ系アメリカ人の音楽とアイデン ティティー
論文審査委員	主査 教授 元山 千歳 副査 教授 福田 京一 副査 教授 藤谷 聖和（龍谷大学）

論文内容の要旨

序論

音楽はメディアあるいはメディア・テクノロジーであり、ローカルな伝統の再生産とこれを超えてネットワーク化する場への人びとの参加としてある。アフリカ系アメリカ人のジャズ、ラップなど音楽サブカルチャーは、グローバルな場において、美的でありながら政治的な力として、国境、人種、階級などの境界を横断する。本論は、いわば音楽のカルチュラル・スタディーズ、そしてメディア・スタディーズである。

第1章 メディア文化とアイデンティティ

マーシャル・マクルーハンおよびスチュワート・ホルの理論をもとに、メディアはどのようにして日常をつくりアイデンティティをつくるか。主体、他者、言説の観点からプロセスとしてのアイデンティティについて論述する。

第2章 音楽とアイデンティティ

音楽とは、楽譜、楽器、ステージ、CDなどのメディア装置とこれに参加する演奏者やオーディエンスとのかかわりのなかで上演されるプロセスである。時代や場所の変位とともに変容し、上演のさなか、自己と集団を結びつけ意味を共有させるメディアとしてある。音楽は、自己と他者の共演として、アイデンティティを生産する場である。

第3章 アメリカの音楽とアイデンティティ

アメリカの国歌は、どこでだれによって歌われ聞かれたとしても、ナショナル・アイデンティティの表出である。たとえば *The Bay Psalm Book* (1640) は聖書の詩編をまとめたものだが、歌集として教会で歌われた。この現場にあって、共同体の理想として、アメリカのナショナル・アイデンティティはつ

くられはじめた。しかし、このコミュニティから、先住民、黒人、そしてアイルランド系音楽は、除外されていたのである。

第4章 音楽の価値と文化

音楽の価値とはなにか。アドルノの言うように、ジャズは奴隷の音楽であり、シンクペーションは下層階級のものなのだろうか。問題とすべきは、ポピュラー音楽は低級であるという価値設定は、階級や民族などに関わりながら、マイノリティの抑圧を再生産してしまうところにある。

第5章 音楽文化とグローバルネットワーク

音楽は、グローバルネットワークのなかで捉えられなければならない。メディア・テクノロジーは、音楽的言説や創造を根本から変容させているからである。ローカルな文化のグローバルな場への拡張と回帰という循環のなかで、アフリカ系アメリカ人の音楽は議論されなければならない。

第6章 アフリカ系アメリカ人のジャズと文化実践

黒人音楽は、公民権運動とともにある。というのも、公民権運動が育んだ連帯の政治は、アフリカ系アメリカ人の音楽に政治的意味合いをもたせ、アメリカの自由と平等をグローバルに再生産する方向へと動機づけたのである。ジャズは、人種を越えてあらゆる差異を横断している。コールマンのフリー・ジャズは、ハーモロディスク理論のもと差異でありながら拡張でもある自由な身体として、デイビスのモード・ジャズへと引き継がれ、自由への希求として、グローバルに再生産されつづける。

第7章 ラップ・ミュージックの実践

ラップは、アメリカのサウスブロンクスという地域に関わる。サウスブロンクスは貧困と暴力と荒廃、つまり「無法地帯」として知られるが、この地域から、ヒップホップというサブカルチャーは誕生し、「無法地帯」を脱領地化する。ミュージック・ビデオなどのテクノロジーによって、グローバルな経験へと仕立て直される。ラップのパブリック・エナミーと映画監督のスパイク・リーなどの共同は、シーガルのいう「ブラック・ディアスポラ」としてネットワーク化し権力に立ち向かう物語をつくりつづける。それは権力と闘う声として世界中に拡散する。

第8章 エスペランザ・スポルディングの実践とアメリカ

2009年、オバマ大統領のノーベル平和賞受賞コンサートで、演奏したのがスポルディングである。スポルディングは、ハイブリッドな身体を、上演した。人はどのような人物にでもなりえることを、スポルディングは音楽として表現し、そうするなかで、多民族国家アメリカがナショナルな身体としてもつ理想と現実のジレンマを上演する。

第9章 アフリカ系アメリカ人の音楽と上演 — 自由の物語の再演

「アラブの春」とソーシャルメディアについて論じる。メディアはどこでも、いつでも、人をグローバル環境に配置するが、エジプトのタハリール広場は、ネットワークの場となり、そこはアラブ・ヒップホップ上演の場ともなる。ジャスミン革命をリードしたことで知られるエル・ジェネラルは、フェイスブックを活動の拠点とし、その政治的活動としてのラップを拡散させた。これにつづきドン・ジュアンは、アラブにおける詩の文化を継承しつつ、ハイブリッドな音楽上演を、自由の物語の再演として試みる。

終章 連帯のネットワーク

2011年、ユネスコは、4月30日を「国際ジャズデイ」とし、平和と結束、対話と協力を推進する力としてのジャズを国際社会に浸透させることを目標とし、2012年に開催された。ジャズはアフリカをルーツにしなが、西洋音楽様式によって表現されつつ、しかしさまざまな文化の多様性を活かしつつ人々を結びつける。ジャズは音楽を越えたネットワークとして、ネグリとハートのいう〈共〉感覚を生みだす。個でありながら共、人種的でありながらハイブリッド、ローカルでありながらグローバル、美的でありながら政治的—このメディアとしての音楽が、コスモポリタニズム実現への道を拓く力ではないか。

口述試問及び審査結果

- A. 先行研究と論述展開：マクルーハン、ホール、シルバーストーン、ネグリとハートなどの研究者のテキストを主な先行研究としているが、とくに理論についての論述展開は充分とは言えない箇所があるのではないか。
- B. 全体内容： 1. アフリカ系アメリカ人の音楽は人種的アイデンティティをどのように生産し再生産しつづけているか。再生産されつづける人種的アイデンティティは、グローバルネットワークのなかでどのように変容しつづけるか。 2. アメリカの物語とはどのような物語か。 3. グローバルネットワークにおいてローカルな文化はどのように接合されるのか。
- C. 重要語句： メディアとサブカルチャー、脱領土化、脱中心化、丘の上の町、明白な天命、タハリール広場、ナショナルアイデンティティ、アメリカの脱物語、アメリカンドリーム、アラブ・ヒップホップ、コスモポリタニズムなど、論文展開重要語句は、それぞれの使用起源と意味について充分理解され使用されているかどうか。
- D. 誤字・脱字・あいまい表記：「ジャズやヒップホップに特徴的なリズムの起源も同じくアフリカにある」（例えばジャマイカの・・・）とあるがジャマイカはアフリカのように読める。「当時のアイルランド系移民にとって」の「当時」とはいつのことか。「想像のネットワーク」という表現は正確かどうか。
- E. 引用文献： 引用文献は、適切であったかどうか。3名の審査員から、それぞれA～Eに関してそれぞれ試問が行われた。学位請求者は、すべての試問に明快に答えられたわけではないが、今後の課題としたい旨の対応もふくめて、学位請求者として概ね適切な応問内容であった。

以上、審査の結果、本学博士の学位を授与するに値すると認められた。

以上